
蝙蝠の世界にとりっぷ！

居ぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝙蝠の世界にとりつぶ！

【Nコード】

N0101P

【作者名】

居ぬ

【あらすじ】

夕花さま発の“動物の世界にとりつぶ”シリーズに影響を受け思わず書いてしまいました。少し他の話とは違う赴きになってしまったかもしれませんが……、暇潰し程度に読んで頂ければ光栄です。

ある日の手紙<0>

拝啓、ソラちゃん

お元気でしょうか？

ソラちゃんに対してこの質問をするのはあまりにも無意味だろうけど……

恐らく相変わらずヤバイ仕事に手を出しつつ昼間っから酒飲みギャンブルに打ち込み、ヤクザに追われながらも

笑いながら毎日楽しく過ごしているのだろぅと思います。

仕事の付き添いと連れ回されて生死の境をさまよったこと幾千回

ソラちゃんみたくゾンビのようなタフさも義姉ちゃんみたく怪人的な体力も持ち合わせていなかったオレが、あまりにも過激な日常に堪えきれず高校卒業と同時に家を出た事は昨日の事のようにありありと思い出せます。

思えばあれから一度も顔を出していませんね、食事はちゃんと採れているでしょうか？部屋は片付いているでしょうか？洗濯物はキッチンと洗っていますか？

ゴキブリ並みの生命力を持つソラちゃんなので体の心配はするだけ無駄だと思いますが果たして人並みの生活を送れているのか、それだけが心配です。

義姉ちゃんは基本放任主義だし自分の事で手一杯だろぅから一度家に帰って様子を見たいのですがそついう訳にもいきそぅにありません。

それにはあまりに遠くに来すぎました。
ええ、宇宙旅行も真っ青です。

ソラちゃんのお陰で大抵の事には驚かない野太い精神を身に付けたつもりでしたが、之には流石に絶句しましたよ。

まさかの異世界です。

そう、ゲームや漫画なんかによく登場するあれですよ、まさか自分が身を以って体験する日が来ようとは……………

この世界では当たり前のように…………動物から人に変化する獣人達が生活し支配していて、寧ろオレのような普通の人間は外界からやって来た落人という人達が僅かにいるのみなのだという。

しかも、二度と帰れないと宣告されました、でも何故か手紙は届くという不思議。

まあ、特に親しい友人も居ないし

ソラちゃんや義姉さんに会えなくなる事以外特に其方に未練はありませんが、

せつかく浪人してまで受けた大学が勿体無いような気がします……………
つか勿体無い。

もしかすると探せば帰る方法があるのかもしれないけど…………

とある事情があり、帰れるとしても、それはまたずっと先の話になりそうです。

当初、此方に来た時は（蝙蝠族に世話になっっているんだけど）羽根を生やした黒い悪魔達の姿に恐怖に怯えるばかりでしたが来てから早一ヶ月、ようやく此方の生活にも馴れ、この生活に愛着すら感じ

てきました。

嫌いなモノも毎日見てれば情も湧くもので……………いや、こっちの話ね

コチラでも頭を抱えるような出来事がイロイロあったけど

なんだかんだいって取り敢えずオレは元気にしています。

そんな訳だからもし、そっちに失踪の連絡が行くような事になっても変な心配はせずに、ああそうなんだと軽く流してしまっただけです。

それじゃ、非常識な生活もほどにしておくべく普通に過ごしてください。

暇があつたらまた手紙を書きます

ソラちゃんの息子より愛を込めて

P S ・会う機会があつたら義姉ちゃんにも宜しく言っただけです

「ふう」

ようやくと育ての親であるソラちゃん宛ての文を書き終え、オレにと、沖野 良平は手紙を読み返した。

内容は短めにと言われていたけど書きたいままに書き綴っていたら思った以上に長くなってしまった、数回推敲したのに相もかわらず幼稚な文章だなと凹み、書き直そうかとペンを取って、……別に良

いかと便箋に入れて封をした。

『りよーへー……終わった？』

突然の声に窓の外を見れば黒い影がハタハタと翼をはためかせている。

それに気付いたオレは急いで窓を開けて“彼女”を招き入れた。黒い影は窓から室内に飛来しヒラリと隣の椅子に舞い降りると淡い光りを発しながら人化し、黒いドレスに身を包んだ華奢な少女が現れた。

彼女の名前はファイ

蝙蝠族の女性で

オレがこの世界で初めて逢った獣人だ

右も左も判らない状態のオレを嫌がるのも構わずつきつきりでイロハを教えてくれた恩人で、彼女には全く頭が上がらない。彼女が族長の姉という事は最近知った事実。そんな彼女がオレのこの仕事場兼住居にやって来たのは、（普段から特に用が無くても勝手にやって来る）オレが親に手紙を書くと言き手紙を届ける役を買ってくれたからだ。

そんな訳でこの世界での仕事・小さきもの（まだ変身できない獣人の子供）の世話や医者モドキ、を終えたオレは心配しているであろう親に近況を知らせる手紙をつい先程書き終えた訳なのだが……

「ってか、本当に届くのかな、コレ」

手紙を掴みヒラヒラさせて回答の出るはずのない疑問を口にする。

「…………さあ？」

ファイは首を傾けて曖昧に返事を返した。

ファイの知り合いのツテに向こうの世界に手紙を送る方法を知ってる人がいると聞いて、それならばと気合いを入れて手紙を書き始めたのが昨日のこと

しかし、よくよくファイの話を聞いてみるとそれはあくまでも気休めのようなものであり実際に届くのか否かはやぶさかではないらしい事が発覚。向こうに戻れないのに確認出来る訳無いからなあ……

折角文才の無い頭を酷使して慣れない手紙を書いたのに、これが届かないと言ったら虚し過ぎる。

「……………」

届けば良いな……なんて、竹茶を飲みながらそんな事を考えているとファイがなにか期待したような目でこちらを見つめているのがついた。

何？と目で問い掛けてみれば

「…………あの事は書いた？」

ぶっ

思わず、竹茶を吹き出した。

その話題はダイレクト過ぎるだろ！！

「…………いや、そういう重大な知らせはもちときちんとかいたがいかと……………」

ファイの質問に口を吃らせて返事した。

実はオレは彼女と人生最大の約束事を交わしているのだが（内容は…………恥ずかしくて言えるか！！）親に手紙を送ると聞いてからというものの、彼女はしきりにしつこく報告を促してくる。

以前、人生の節目になるような出来事は親とか知り合いにはきちんと報告するものだと言ったのはオレだけでも極端というか…………

にしても親にたった一言報告するのがこんなに緊張するものだと思わなかった…………

そんなの一言で済むじゃん、なーんて思っていた過去のオレを絞め殺してやりたい。

言いたいけど言いたくないような
つてか言ったら恥ずかしくて死ねる。

でも言わなきゃ
でも…………

……………うがあああ！！

と恥ずかしさやら使命感やらでオレの脳みそは爆発寸前

しかし、そんな脳内の葛藤をファイは別の意味で捉えたのか。

なんか不審な目でコチラを睨んでいる

「約束………破るつもり？」

はあ、ホント勘弁してくれ。

「んな訳ない、ただ、ああいう事はちょっと書きづらいただけだ、」

「……ふーん」

一応本心と言ったのだが、約束をうやむやにしていまいそうなそんな微妙な態度が気に食わなかったらしく眉を潜められた。それでも不承不承納得してくれたようにうで

「いつてくる」

多少拗ねるようにそう言くと再び獣化し、書き終えた手紙を引っつかみ一直線に窓から出ると

月明かりに照らされる夜空へ空高く飛び立っていった。

おお速い速い

瞬く間にその黒い姿が闇に紛れ地の果てに消えるのを見送って

「反故になんてする訳無いだろうが……」

ぽつりと一言、愛しい彼女の飛び立った空を見上げて呟いた。

……さて、さつきから城の方で

ねーちゃん！！ねーちゃん！！

と必死に姉を探している若き族長さんの相手をしますかね

オレは仕事部屋を後にして城に繋がる洞窟の奥へと入っていった。

ある日の手紙<0>（後書き）

男の落人ってありなのだろうか……？
問題があったら御一報を

多分あと二丁三話続くハズ

蝙蝠の世界へようこそ・前（1）（前書き）

全7話構成を予定しております。
では、どうぞ

蝙蝠の世界へようこそ・前（１）

どれくらいの時間が経っただろうか……

気づけばオレは見馴れない洞窟の中に居た。

見上げてみると天井にポツカリと開いた空洞から夜空が覗き、真ん丸お月様が星と一緒にコチラを見下ろしている

「綺麗だなあ」

通常星というのは満月の時には月の光りに紛れて殆ど見えない事が多いのだが

空気が綺麗な為かここでは霞むことなく綺麗にハッキリと見ることが出来る

空気の汚れた都会では絶対に見ることの出来ない、あまりにも綺麗な情景に暫し見取れていた。

しかし、いつまでも見取れている訳にもいかない。

「…………さて、どうしよう」

ゴツゴツの壁に背をもたれて脚の間から顔を出すというかなりマヌケな恰好を晒しながら

こんな状況に陥った経緯を思い返した。

恐らくそれは数時間前の事

久々に遠出をして遊びほうけて随分と帰るのが遅くなってしまった
オレは帰路の途中に居た。

腕時計を見てみればもう11:00過ぎ

両手に荷物を抱えて流石に少し遊びすぎたかなと反省する。

でも、育ての親であるソラちゃんの家から逃げ出し晴れて一人暮らしのオレに門限等存在しないし別に夜遅くなったとして誰も困ったりはしないからまあ良いか

なんて気楽に構えて家に帰っていたのだが。

しかし、それがいけなかった。

借家に到着すると

電灯の前に黒い悪魔

- 蝙蝠がハタハタと飛んでいたのだ。

(げ)

そう思ったオレを責める奴は居ないだろう

小学生の頃、蝙蝠に関わって酷い目にあつたのだ。

それ以来オレは蝙蝠が大の苦手で、今でも見ただけであの悲惨な思い出が蘇り腹が痛くなる。

借家は直ぐそこなのだから無視して通り抜ける事も出来なくは無いが蝙蝠に必要以上に近づく事はオレの胃腸の健康と精神衛生上あまり宜しくない。

(仕方が無い……………)

蝙蝠が立ち去るのを待つか、と寒いのを堪えて物陰に隠れて暫く

様子を見る事にしただが……

世の中そう甘くないようで、ふとした瞬間なんかピタリと目が合ってしまう、背中を伝う悪寒に、何か嫌々な予感がした。

そしてその嫌な予感は見事に的中し、次の瞬間。蝙蝠は何を思ったのか、オレの姿を確認するなり

……あろう事がコチラに向かって一直線に突っ込んできたのだ！

「え、ちょー！」

頭が真っ白に

心臓が飛び出るような状況とは正にこの事か！！
とてつもない驚異が目前に迫っている！！

一目散に蝙蝠とは反対方向に駆け出すが、どういう訳か蝙蝠はオレの後を追ってついて来る

（ちょっと蝙蝠さん！？なんでこっち来んの！？しかもなんか後ろにハートマークが見えるんですけど！！オレは別にあなたに喜ぶような物は持ってませんよ！？こっち来ないで！！）

しかし、そんなオレの願い虚しく

蝙蝠がスピードを弱める気配は全くない

走るオレ、追いかける蝙蝠

かくしてオレと蝙蝠による夜の追いかけっこが始まったのである

……

逃げること数10分

一向に諦める気配の無い追跡者に疲れ果てるオレ
いくら曲がり道で撒こうとしても正確に道を探り当ててしまうの
だからたまったもんじゃ無い。
もう借家からはだいぶ離れてしまっている。

（ああ、もう今日中に家に帰るのは無理か……）

と走る道の先

道のと真ん中で、まるで入ってくれと言わんばかりにポツカリと大
きな口を開けているマンホールを確認。
周りに標識も何も無いことから別に工事をしている訳でも無さそう
だ。

誰かの悪戯か、はたまた蓋が何かの衝撃で吹っ飛んだのか。
いずれにしても……

「危ないなっ！」

そう掛け声をあげてマンホールを飛び越えようと跳躍した。
マンホールの直径は一メートルも無い
一般的な成人男性の体力を以ってすれば造作も無く軽く越えられる
ハズ……うん、越えられるハズだったんだよ……

そう、オレの足が大地を離れた途端そのマンホールが……まるで
意思を持った生き物かのように
オレの目標着地点へと素早く移動したりしなければ……

「……………は？」

当然の事ながらオレは普通の人間だ空中で方向転換も回避も出来る

はずがない。

間拔けな声を上げたオレは成す術も無い、オレはマンホールの縁にぶつかる事も無く真つ暗な口の中へとダーク、ものの見事に暗闇に飲み込まれてしまった。

「んぎゃああああ！！！」

（死ぬ！！死ぬ！！）

このまま落ちたらタダじゃ済まないと慌てて何かに掴まらねばと周りに手を伸ばすが、手は空を掴むばかりで一向に壁に届く気配がない

（何だこの無駄に広い空間は！！）

どんどんと遠ざかる外への出口

必死に手足をばたつかせ、足掻く事数十秒、十分に加速していく体に最早助からないとオレは抵抗する事を完全に諦めた。

赤服の配管工のオッサンは穴に落ちるときこんな気分なのだろうか

（マンホールに落ちて死亡とか…情けねえ）

オレが最後に見たのは

嬉々と……いや、キキと鳴き声を上げながら、遠退く光よりコチラを見下ろす蝙蝠の姿だった。

（ああ、蝙蝠と関わるとロクな事が無い）

そんな事を思いながらオレは意識を手放した。

そして現在に至る

何故か生きてます、空気が美味しいです

しかし、あれだけの高さから落ちて何故助かったのだろうか、途中で死を覚悟する程度には長く落ちていたはずなのに……

そもそもあのマンホール（？）は一体何だったんだ？

助かった事は有り難いけど、確実に何か物凄く面倒な事に巻き込まれたなと長年の経験が告げていた。

とにかく周りの状況を確認しない事には判断のしようが無い……
…そう思つて、さっきから体を動かして立ち上がろうとしているのですが、どうやら背中が何かの溝にすっぽりと嵌まってしまったよう……
…加えて体を酷く打ち付けてしまったらしく体が痛み、思うように抜け出せない……………

（うーん…）

困った……………。

こんな所でこんなマヌケな恰好で人知れず果てるのは御免被る
なんとかして抜け出さなければ

とここで闇の中に輝く二つの光に気が付く
月の明かりに馴れてしまつてまだ目が暗闇に順応していない

暫く凝視して見てみれば……………体長60cmはあるつかという巨大な
蝙蝠が天井からぶら下がりコチラを見下ろしていた。

「……………はい？」

でかい蝙蝠、そうとうでかい蝙蝠

「ん、んぎゃー！ー！ー！」

ばっ化け蝙蝠！！??

何かの新種なのか！？

いつの間にソコに居たのだろうか

腹がキリキリと傷みはじめる

こんな所に居られない、逃げ出そうと体を必死にジタバタさせる
が体が痛むばかりで一向にこの間抜けな体勢からは抜け出せない
しかも、こちらが騒いでいる間にその化け蝙蝠はだんだんと大きく
なっている

（ちょ、これ無理！！無理）

まさか、でかくなってオレを頭から丸呑みするつもりか！？

或はオレの体が枯れるまで血を吸い尽くすつもりか！？

オレが脳内でスプラッタな光景を広げている中

そんな予想とは裏腹に、耳は縮み指の間に張られた皮膜も引いて
いき肌も白みがかっていくのを見た。

みるみるうちに形を変えていく蝙蝠

一分と経たぬうちに巨大蝙蝠の姿は消え、代わりに黒い髪の一人の
美少女がぶら下がっていた。

絹のようにサラサラとした黒髪に

闇のように吸い込まれるような漆黒の瞳

手足は細く痩せ

肌は漂白されたかのように病的に白い

目の下には薄らと隈が見える

どこか幻想的な雰囲気を漂わせるその美少女は……

コチラを見詰めたまま口元をニンマリと歪ませると

「やっと来た」

そう呟いた。

……まるで長年待ち望んでいた玩具がようやく手に入ったかのよう
に。

その時、オレはというと……

立て続けに起きた、あまりにも摩訶不思議な現象に頭の処理が追いつかず、完全に思考が停止し軽く放心状態に陥っていた。

数分間の沈黙

ようやくと頭が通常の思考回路を取り戻した時、ハタと気付く
目の前の少女が一糸纏わぬ裸体である事に……

「ちょ／＼／＼！？服！！服！！！」

小さい頃から義姉ちゃんの裸なら飽きる程見てきたが

恐らくは同年代以下の、しかも赤の他人の裸を見て落ち着いてい
られるほどオレは枯れてはいない！！

オレは顔を真っ赤にして服を着ていない事を慌てて指摘するが。

「……ん？」

少女は今その事に気付いたようにゆっくりと自分の体を見回して…

……

少し悩むように頭を傾けたが

しかし、特に気にすることも無く再びこちらに向き直ってしまった。

……………いやいや

「／／／だから服を着れ！！！（恥怒）！！！！！」

心の底からオレは叫んだ。

蝙蝠の世界へようこそ・後（2）

露出狂少女は渋々と

どこからともなく黒いドレスを取り出し

ぶら下がったまま器用に着用すると

鉄棒の上をクルリと一回転し

フワリと地面に舞い降りて

そのままスタスタと座り込みじーっと顔を覗き込んできた。

綺麗な女の子にじっと見詰められるのは悪い気はしないが

それよりも早く助けたくないといのまま頸の骨が変な風に曲がってしまふ。

「……さかさま好き？」

……どうやら彼女はオレがこの変な恰好を好き好んでやっている
と勘違いしているらしい

んなわけあるか！！

何を思つて、好き好んで人前でこんなマヌケな恰好を晒す奴が居る
と考えたのか数十分ほど問いただしてみたいところだが。
その衝動を押さえて

「……いや、ちょっと助けてくれ」

手足をヒョコヒョコと動かして身動きがとれないことアピールする

と、ようやくオレわが嵌まって動けないでいる事を察してくれ、この露出狂少女の手を借りてどうにか抜け出す事に成功した。

すっぱ抜けた結果、一回転して頭を激しく打ち付けて悶絶したのは無かったことにしておく。

ようやく自由の身になったオレは数回の深呼吸の後
落ち着いた頃合いを見計らい質問を……

「……で、君は何なんだよ？つか此処は何処なのさ！！？？」

……落ち着いたつもりだったが、どうやらそうでもなかったらしい。

実際にオレの口から出た言葉は思っていたのに反して相手に怒鳴りつけるような、とにかく余裕の力ケラもない乱暴な言葉だった。しかし、そんないいようの無い不安に苛まれるオレに彼女はゆっくりとした口調で、言い聞かせるように言葉を紡いだ。

「わたしのなまえは……ファイ」

そして、ひとくぎり間を空けて

「ここは異世界」

ハッキリとそう言った。

どうやら此処はオレらの世界と全く異なる理の上に成り立つ異世界であるらしい

この世界では、様々な動物が闊歩し
上位種という獣から人への変身能力を持つ種族が統率し支配してい
るのだそうだ

元から在住する人間というのは存在せず、稀に人間界から落ちて来
る落人という人が数人居るばかりらしい。

しかし、最近は数年に一人ぐらいしか来なかったはずの落人が、晴
れ時々落人と言われるほど過去に例を見ない頻度でやって来るそう
で、なかなかの人数が増えてきているとのこと。

因みにここ最近の頻発期に今まで落ちてきた落人は全て女性であり
男性で落ちてきたのはオレが初めてらしい。

凄いね！！オレ、快拳じゃん！！

……………全ッ然嬉しくないけどな！！

つか、なんという中二設定、どこのゲームの世界だよ！！

ここは獣人だらけの異世界です、なんてあまりに非現実的な宣告に
思わず頭を抱え込んだ。

普通ならそんな馬鹿げた話あるかと一笑に付す所だろう。

しかし、オレは先程彼女がまさに蝙蝠から人になる瞬間をこの目で
確認ばかりだ。

彼女の話を否定するなら彼女の存在自体が説明つかなくなる。

「……………オレは夢でも見てるのか？」

ぽつりとそう呟くとファイと名乗った少女は何を思ったのか……………
突然腕にガブリと噛み付いてきた。

「いだだだっ！！」

ぎちぎちと歯が皮膚に食い込み
痛みのあまり悲鳴を上げると

ファイは素早く下がり口を拭った。

想像以上の力でしつかりと噛まれた腕に紅く、くつきりと歯形が残りジンジンと痛んだ。

「……夢じゃない」

「………みたいね」

どうやら少々現実逃避気味だったオレにこれがハッキリと現実であると認識させてくれたみたいだが……もう少し別の方法はなかったのか？

（はあ………嘆いていても仕方ないか）

そんな突拍子もない宣告を受けてはいはいそうですかと納得できるわけでは無いが

いつまでもこんな場所に佇んでウジウジしていても状況が良くなる訳でもない。

もつと落ち着ける所で、詳しく話を聞く方が遥かに生産的だ。
もしかすると元の世界に帰る方法も聞けるかもしれない。

「……名前」

そういえばあまりにも衝撃的な出来事の連続で頭が一杯で
こっちの名前を名乗るのをすっかり忘れていた。

「ああ、オレの名前は沖野良平……宜しくな」

そう名前を名乗ると

「……りょーへー、りょーへ……」

ファイはなにやらオレの名前を繰り返したかと思うと、気持ち顔を少し赤らめて

「……よろしく」

そう言つて、はにかんだ笑いをうかべた。

その後、なんやかんやでファイの住み処に案内してもらつ事になった。

長く複雑に入り組んだ洞窟の中を歩く事数十分、道中で無駄に多い休憩時間を経て、洞窟を抜けると……

山のようにそびえ立つ巨大な城の麓に出た。

思わず啞然として見上げるオレ

でかい、でかい、

デカすぎてこの位置だと全体が見渡せない、この城がファイの住み処だという。

洞窟の中の住居とか、小さな小屋や家を想像していたけど。

もしかしてファイって結構良いところのお嬢さんなのだろうか？

そんな風にじつと暫く眺めていると城の方から何か茶色い物体が飛んで来るのが見えた。

『ねーちゃん！！』

声を上げてコチラに近付く蝙蝠。

その蝙蝠はハタハタと突っ込んできたかと思うとパァッと光り一人の青年が現れた

美青年

美少年が成長したらこうなるよという例を絵に書いて表したような、まさに美青年だった。

整った顔立ちに少し癖のかかった赤毛

ルビーのように紅い瞳、

背は超身長という訳ではないが

それでもオレよりも数cm程目線が高い

年齢はオレよりも少し年上っぽく見えるが……外人(?)は見た目よりも老けて見えるらしいからよう分からん、

イケメンは滅べば良いのに

……………ああ本音が……………

「まったく……………なんの前置きも無く勝手に出掛けないでくれよなあ……………」

「うめん」

どうやらファイと親しい間柄の人物らしい。おそらく兄弟なのだろう……………全然顔は似てないけどね。

(しかし、ねーちゃんって……)

見た目に似合わずガキっぽい言葉遣いに
それに二人を見較べてみると明らかにファイの方が年下に見えるの
だが……

やっぱ見た目に反して結構若いのか？

「ん、誰だ？ソイツ」

ようやくコチラの存在に気づいた美青年はなんだか物凄くウザった
そうな顔を隠そうともせずにコチラに向けてきた。
するとファイがオレの紹介を……

「りょーへー、今日からいつしょにすむ」

(つと、え？)

いつの間にか勝手に話が進んでいた。

まだそんなこと決めてないと言おうと口を開こうとして。

「はあ！！！？？？」

コッチが声を上げる前に向こうの方から抗議の声を上げてくれた。

「なんで、こんな得体の知れない奴をうちで預からなきゃならない
んだー！」

どうやら、

「りょーへーは落人」

「は？落人？どうみてもコイツ男だろ！」

「落人がみんな女とは限らない」

へ？そうなの？とまぬけた顔。

どうやら落人は女だけだと思い込んでいたっぽい。

「……………だとしても、こんな奴、そこら辺に放っておけばいいだろうが……！」

男にかける情けなんて一切無いと

いつそ清々しい程その背中が語っていた。

すると、ファイの眉間に深く皺を寄せて

「このルール……………忘れた？」

怒気を含んだ声で弟（？）を諷めた。

少々オイタが過ぎたようだ。

ファイの怒り顔は元の暗い雰囲気とあいまってかなり恐ろしく。

さつきまで、口達者だった弟君は途端、口を閉ざし黙り込んでしまった。

沈黙すること数分、凹んでいた彼は

突如顔を上げキツとコチラを睨みつけて

「お、俺は認めた訳じゃ無いからな……！」

獣化して城の中に飛び立ってしまった。

いや、別に認めて貰わなくても良いんだけどなあ……………

何にせよ暫くはここに住むしかない、
城の中を歩くついでに案内してくれる事になった。
食堂や、図書館（室）、お手伝いさんの部屋等を順に説明してくれ
るファイ。

城には他にも蝙蝠の獣人が多く居たが幸いな事にこの住人はあまり
蝙蝠の姿に変身しないみたいだ。

これならなんとかやっていけるかも……
と感じながら案内が続き

「そこはちいさきものたちのへや、今は中で寝てる」

廊下の突き当たりの一際大きな扉に指を指してファイが言った。

“ちいさきもの”とはいったい何なのだろうか？

興味で扉を開き、中を覗いてみると

部屋の中には一面のこうも「……

オレは素早く扉を閉めた

「いつもは城の中をとびまわってる」

へーそうなんだ

「……………帰って良い？」

「……………何処へ？」

「ここから近い別の集落は無いのか？」

「……ここから近い所でも歩いて4日は掛かる……」

何の準備も無く歩いて行ける距離ではないね。

……八方塞がり

選択肢が無いことは判っている……でも

「こんな所に居たら元の世界に戻るまでオレの腹がもたない!!」

蝙蝠と遭遇する頻度が少ないのなら

まだ少しの間は堪えられると思ったが、

あんなに大量の蝙蝠が城中に飛び回られたらたまったもんじゃない

!!!!

すると、今の発言に何か問題があったのか何いつてんの?という顔をした。

「……もどれないよ?」

「は?」

あれ、言ってなかったっけ?なんて表情を浮かべて後を続ける

「今まで元の世界に戻れた落人は一人も居ない」

(は!!!???んな話全然聞いてない!!!)

「落人のめんどろは、ほごした獣人族がするそしてに落人に仕事を渡す」

仕事って？

「落人のさいしょのしごとはだいたい、ちいさきもののせわ」

「がんばろう、しょーへー」

ニツコリと微笑み手を差し出す彼女の姿が……まるで悪魔の手先に見えた。

かくしてオレの新天地での新たな生活が始まったのである。

蝙蝠の世界へようこそ・後(2) (後書き)

小説を書きはじめてばかりなのに申し訳ありませんが、受験で忙しくなり次の更新は更に数ヶ月先になりそうです。
駄文な上更新が遅れる事をお詫びします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0101p/>

蝙蝠の世界にとりっぷ！

2010年12月25日21時14分発行